

未熟児網膜症による視覚障害の動向

東京都心身障害者福祉センター

原 田 政 美
岡 田 節 子

研究目的

最近における未熟児網膜症による視覚障害の発生状況とその実態を明らかにし、療育上の問題点を検討する。

研究方法

東京都心身障害者福祉センターに来所した視覚障害乳幼児を対象として、未熟児網膜症による視覚障害の最近の傾向、および合併している心身の異常を調査する。ただしセンターでは、視覚障害の原因が未熟児網膜症であることを確認することが困難なので、その疑いの濃いものをここでは網膜症児とみなした。視覚障害児と呼ぶものの範囲は、両眼ともに回復不能な視覚障害があるため日常生活にかなりの不自由をきたしているか、あるいは不自由があると推定されるものである。矯正視力でいえば0.1程度までのものであるが、矯正視力を正確に測定し得ないものが多いので、行動が手さぐりになるものを盲とし、視覚に依存する行動が可能なものを弱視とした。

研究結果

昭和45年出生から昭和54年出生までの東京都の全出生児数、低体重出生児数、および未熟児網膜症による視覚障害児数を出生年別にまとめたものを表1に示す。網膜症児数として掲げている数字は、センターに来所した数であるから、来所していない網膜症児のことも考慮しなければならない。しかしその数は、多くても各年1~2名程度であると思われる。なお昭和55年出生児は5名が来所しているが、これから来所する可能性もあるので54年出生児までにとどめた。

昭和45年を100としたカッコ内の数字からわかるように、東京都における全出生児数は逐年減少しているが、低体重出生児数はさらにそれを上回る減少を示している。ただし低体重児のうち

1,000名未満のもの数は、一時減少傾向がみられたが、最近また増加の傾向にあるようである。未熟児網膜症による視覚障害児数は、昭和49年ごろから著しい減少を示していて、この減少傾向は低体重児数の減少傾向を遙かに上回っている。

表2は、未熟児網膜症による視覚障害児を出生時体重から3群に分け、さらに盲と弱視とに区分して各出生年ごとの実数をみたものである。

1,000名未満の群では、この数年間に盲の数が減少しているようにみえるが、その分だけ弱視が増加して、全体として明らかな減少傾向はみられない。一方、1,000名~1,499名の群では、盲および弱視ともに著しい減少がみられる。さらに1,500名以上の群では、盲および弱視とも発生が皆無に近い状態である。

表3は、未熟児網膜症による視覚障害児に合併している主要な心身障害を出生年別にみたものである。この2~3年の重複障害児の発生は少ないようにみえるが、確実なことは今後の検討にまつほかはない。なお重複している障害の実数は同一人につき別々に数えたので、この合計は重複障害児の数とは一致しない。同一人で精神遅滞とてんかんの両者を合併した場合などがあるわけである。

以上の諸数字は、既発表の数字と多少相違する点がある。今回は東京都における全出生児数と低体重出生児数を引用したので、これに見合った東京都出生の視覚障害児だけをとりあげたこと、また視力の上限を0.1程度としたことなどが既発表分と違うからである。

考 察

昭和45年以降の10年間を概観してみると、未熟児網膜症による視覚障害児の発生が逐年減少していることは確かである。東京都ではこの10年間に出生児数および低体重出生児数がともに激減しているが、これを上回る減少である。

これには、1,500g以上の体重で出生した群では原則的に発生しなくなったこと、および1,000g～1,499g群における発生の著明な減少が関係している。一方、1,000g未満の群では減少傾向がみられないだけでなく、この群の出生児数が最近やや増加の傾向にあるので楽観は許されない。ただし全体を通じて、盲の数が減少していることは確かである。

精神遅滞、てんかん、脳性麻痺などの合併は、早期療育の効果を著しく阻害するものである。この2～3年は合併率がやや低下しているようであるが、この問題は今後とも解決困難な課題として残るものと思われる。

要 約

東京都心身障害者福祉センターに來所した視覚障害乳幼児についてみると、最近10年間に未熟児網膜症によるものが著しく減少している。東京都では出生児数および低体重児数ともに最近10年間に激減しているが、未熟児網膜症による視覚障害児の発生はそれを上回って減少している。しかし出生児体重が1,000g未満の群においては減少傾向がみられない。精神遅滞、てんかん、脳性麻痺の合併はこの10年間に多少の減少傾向がみられるが、なお楽観は許されない。

表 1. 最近10年間の東京都出生児数と、未熟児網膜症による視覚障害児数(カッコ内は昭和45年を100とした場合の比率)

生年	全出生児数	低体重児数	1,000g未満再掲	網膜症児数
45	229,991(100)	14,180(100)	175(100)	13(100)
46	232,695(101)	13,151(93)	151(87)	11(85)
47	230,584(100)	12,874(91)	177(101)	12(92)
48	226,372(98)	12,152(86)	165(94)	12(92)
49	209,244(91)	11,225(79)	128(73)	5(38)
50	186,701(81)	9,983(70)	132(75)	7(54)
51	173,538(75)	8,928(63)	130(74)	8(62)
52	164,459(72)	8,676(61)	141(81)	3(23)
53	157,066(68)	8,280(58)	152(87)	3(23)
54	148,543(66)	7,939(56)	167(95)	3(23)

表 2. 最近 10 年間の出生時体重別および盲と弱視別の実数

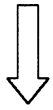
生年	1000g 未満		1,000g ~ 1,499g		1,500g 以上	
	盲	弱視	盲	弱視	盲	弱視
45	2	0	3	4	2	2
46	4	0	3	4	0	0
47	2	0	3	5	1	1
48	4	0	4	2	1	1
49	1	1	2	1	0	0
50	2	1	2	2	0	0
51	3	1	1	2	1	0
52	0	0	1	2	0	0
53	1	1	1	0	0	0
54	0	1	1	1	0	0

表 3. 最近 10 年間の重複障害の状況（各障害の実数は同一人につき別々に数えた。）

生年	重複障害児数 (総数に対する%)	重複障害の種類		
		脳性麻痺	てんかん	精神遅滞
45	8 (62%)	1	3	8
46	10 (91%)	3	5	10
47	9 (75%)	2	3	9
48	7 (58%)	4	4	7
49	3 (60%)	0	1	2
50	5 (71%)	1	3	6
51	7 (86%)	0	3	7
52	1 (33%)	1	0	1
53	2 (67%)	0	1	2
54	1 (33%)	0	0	1



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

東京都心身障害者福祉センターに来所した視覚障害乳幼児についてみると、最近 10 年間に未熟児網膜症によるものが著しく減少している。東京都では出生児数および低体重児数ともに最近 10 年間に激減しているが、未熟児網膜症による視覚障害児の発生はそれを上回って減少している。しかし出生児体重が 1,000g 未満の群においては減少傾向がみられない。精神遅滞、てんかん、脳性麻痺の合併はこの 10 年間に多少の減少傾向がみられるが、なお楽観は許されない。